

I サムエル 19 章「主の守りの中で」

私たちはそれぞれ自分のこれまでの歩みを振り返る時に、あの時は主が守ってくださった、主の不思議なみわざだったということが何度もあるのではないのでしょうか。ダビデの生涯も主のみわざによって守られたことの連続でした。そのような経験を通して信仰の訓練を受けたダビデは、主が私の岩、私の恵みの神であると主にほめ歌を歌いました。

1. ヨナタンの弁護（：1～7）

「サウルは千を討ち、ダビデは万を討った」とのことばを聞いて、サウルは激しく怒り、ダビデを妬み、殺意を抱くようになりました。ついにサウルはダビデを殺すと公言するようになります。その中でダビデを助けてくれる存在がありました。

まずダビデを助けてくれたのはサウルの息子ヨナタンでした。ヨナタンはダビデを非常に愛していたとあります。その愛のもとには、それぞれに与えられていた信仰、すなわち生ける神、主への信頼がありました。ヨナタンはダビデと契約を結んでいました。

それでヨナタンは父サウルと義理の兄弟であり親友であるダビデとの間に立って、仲介者としての役割を果たします。ダビデには、父が殺そうとしていることを告げて、安全な場所に身を隠しているように伝え、自分が父にダビデのことを話すと言います。

そして、父サウルにはダビデを殺すことを思いとどまらせようとします。4～5 節。ヨナタンは熱心に、そして筋の通った理由を挙げて、ダビデを弁護します。三つの理由を挙げています。第一に、ダビデが自分のいのちをかけてペリシテ人と戦い、主が大きな勝利をイスラエルに与えてくださったこと。第二に、ダビデはサウルに大きな益をもたらし、サウルはそれを喜んだこと。第三に、ダビデを殺すことは「咎のない者の血を流す」ことになるので、罪を犯さないで欲しいということです。ヨナタンはこのように理由を挙げて説明し、サウルのプライドを傷つけないようにして、ダビデを殺そうという思いを撤回させようとした。

ヨナタンの愛に基づく熱意あることばに、サウルはダビデ殺害を撤回します。それで、ダビデは以前のようにサウルに仕えるようになりました。

このヨナタンのような存在に、私たちもならせていただきたいと思います。互いの関係に亀裂が入るような時、双方と繋がりのある自分はどのようにするのでしょうか。双方に良い顔をするようになってしまうことがあるのではないのでしょうか。もし一方が他方に悪を行おうとしている時には、罪を犯さないでくださいと言えるようにと教えられます。しかも、熱心に、理路整然と、気持ちを逆撫ですることなく、話すことができるようにと願います。それには、神を愛し、隣人を愛することが必要です。神の愛に満たされていることが必要です。

2. ミカルの機転（：8～17）

ところが、再び戦いが起こり、ダビデがペリシテ人に勝利すると、サウルの状態は戻ってしまいます。9～10 節。このようなサウルの状態は、戦いにおけるダビデの勝利と関連しています。サウルはダビデに対する嫉妬心から、殺意を募らせていくのです。

「わざわいをもたらす、主の霊がサウルに臨んだ」という記述に、神がわざわいをもたらすのかという疑問を持つかもしれませんが、そうではありません。神ご自身は決して悪を行われません。しかし、時には神の目的を果たすために悪魔や悪者のわざわいを許容されることがあります。

また、「わざわいをもたらす、主の霊がサウルに臨んだ」ことは、サウルの状態に関係なく神様が一方的にわざわいをもたらす霊を送ったということではありません。嫉妬から殺意を募らせるサウルが自らわざわいを呼び込んでいるのです。

サウルはまたも槍でダビデを突き刺そうとしました。ダビデは身を避け、自分の家に戻り、難を逃れました。ヨナタンの説得を受け入れ、「主は生きておられる。あれは殺されることはない」と誓ったサウルでしたが、そのときは一時的に気持ちが静められただけでした。人はそんなに簡単に変わりません。再びダビデの勝利によってサウルの罪が刺激されてしまったのです。

サウルはダビデの家に使者たちを遣わし、見張らせ、朝に彼を殺そうとしていました。ここでダビデを助けたのが妻のミカルです。彼女は機転を利かせて、ダビデを窓から逃がし、寝床に偽装をして、「あの人は病気で」と言って時間稼ぎをしました。ミカルに騙されたことが分かると、サウルは彼女に怒りを燃やしました。彼女を殺しかねないほどだったのでしょう。それでミカルはダビデが「逃がしてくれ。私がどうしておまえを殺せるだろうか」と言って脅迫したと嘘をつきました。

サウルの殺意からダビデを助けたのはサウルの二人の子ども、ヨナタンとミカルでした。そのことがサウルの怒りをさらに大きくさせたことでしょう。

ただし、ミカルもダビデを愛していましたが、彼女はヨナタンのように誠実ではありませんでした。ダビデに対する愛も主への愛に基づいているものではなかったでしょう。そして、ダビデとサウルの関係を回復させようとするのではなく、父サウルをだましてダビデを逃したのです。

3. 神の霊の臨在（：18～24）

こうして、ダビデのサウルから逃れる逃亡生活が始まります。ダビデがまず行ったのは、サムエルのところでした。サムエルは家があったラマで預言者たちの監督をする働きをしていたようです。サウルはダビデを捕らえようとして使者たちを遣わします。しかし、このときもダビデに対する守りが与えられました。それは神の霊による不思議な守りでした。

サウルの使者たちがダビデを捕らえるために行くと、そこにサムエルが監督をする預言者の一団がいて、預言をしていました。そこに行ったサウルの使者たちにも神の霊が臨み、彼らも預言したというのです。つまり、使者たちはダビデを捕らえることができる状態ではなくなったということです。サウルはそれを聞くと、再び使者たちを遣わしましたが、二番目の使者たちも同じ状態になりました。サウルはさらに三度目の使者たちを遣わしますが、やはり同じ状態になりました。神様がダビデをそのようにしっかりと守っておられたのです。

それでもサウルは悟らず、自らラマに行きます。すると、サウルにも神の霊が臨みました。23～24節。ダビデを捕らえ、殺そうとするサウルにも神の霊が臨んで、留めました。「サウルも預言者の一人なのか」と言われるようになりました。以前とは違い今回は否定的な意味合いで記されています。

このことはサウルの意志と別に、ヨナタンが説得したように「咎のない者の血を流して、罪ある者と」なることがないようにと神が留められたのです。主が留めていてくださる間に、悔い改めることができるようにと教えられます。「主は生きておられる。あれは殺されることはない」と誓ったのに、それをすぐに破ってしまうサウルですが、そのことばはその通りになるのです。確かに主は生きておられ、ダビデは殺されることはないのです。

このように神の霊による不思議な助けが与えられたことから、先のヨナタンやミカルによって助けられたことの背後にも神様の働きがあったことを知るのです。主によって選ばれ、油注がれた者、そして主の霊が注がれている者を、主が守ってくださるのです。そして、その中で主に取り扱われて、主への信頼において成長させていただくのだと思います。

19章11節の状況が詩篇59篇の表題で言われています。59篇16～17節。苦しみの中で主が砦であった、逃れ場であったと主の守りを感謝して、「私の力よ」「私の恵みの神」と主を賛美しています。神様の恵みを喜び、それで終わらず、神ご自身を賛美しています。

私たちも、主の恵みによって救われて、主の霊をいただいています。主が臨在してくださっていることを知っています。苦難を経験することがあっても、その中で主によって守っていただけます。ますます主を知り、主を賛美する者とならせていただきましょう。主が与えてくださる恵みを喜ぶとともに、それだけでなく、恵みの神をほめたたえる信仰者でありましょう。